

る	土	ら	っ	う	て		は	に	時		そ	男	命	ま	「	子	男	て	で
こ	地	な	て	願	欲	“	は	に	に	の	の	は	で	だ	空	狐	は	を	き
と	を	い	い	い	し	豊	小	男	は	既	後	泣	よ	だ	腹	を	そ	委	な
で	開	ほ	っ	願	い	作	動	は	に	に	そ	き	よ	だ	か	見	ね	い	い
黎	墾	ど	た	懸	い	に	物	薄	は	こ	の	じ	こ	だ	衰	つ	の	さ	こ
嚙	し	の	。い	命	“	し	の	く	登	の	男	ゃ	い	さ	弱	け	道	せ	た
神	、	蓄	っ	に	“	て	足	微	山	世	は	く	つ	い	か	に	端	て	ら
社	さ	え	た	奮	災	欲	跡	笑	客	を	登	り	の	の	よ	で	息	く	ら
へ	ら	を	住	闘	害	し	が	ん	に	離	山	、	命	い	。こ	絶	だ	、	
の	に	持	人	し	を	た	刻	で	発	れ	客	が	救	い	ん	え	さ	喜	
信	領	っ	は	者	起	達	ま	お	見	て	に	え	え	の	ん	て	い	ん	
仰	地	た	さ	の	こ	の	れ	り	さ	い	に	か	か	に	で	い	た	で	
は	を	住	ら	要	さ	世	い	、	れ	た	な	か	あ	な	そ	た	一	そ	
さ	広	人	に	望	な	を	た	す	。奇	が	あ	か	。一	ら	の	匹	れ	れ	
ら	げ	は	増	は	い	治	。妙	ぐ	な	そ	か	。こ	の	全	の	に	に	全	
に	て	平	え	次	“	し	こ	側	こ	の	か	ん	な	可	い	に	に	全	
増	欲	穩	、	々	“	す	と	の	と	そ	か	。こ	あ	い	に	に	に	全	
し	し	な	食	に	“	ぐ	上	土	事	の	か	。こ	あ	い	に	に	に	全	
て	い	こ	う	叶	“	ぐ	に	の	と	の	か	。こ	あ	い	に	に	に	全	
い	困	の	に		そ														

を	つ		怪	と	て	が	人	先	な		陰	る	村	つ	し	誰		つ	き
変	て	人	が	なる	、	起	間	の	土	豊	り	よ	か	た	、	か	が	た	、
え	は	間	現	る	食	き	達	先	地	富	を	う	ら	こ	余	が	た	大	
て	格	にと	れ	作	料	始	は	の	を	な	見	に	町	と	つ	祈	村	村	
い	好	つて	人	物	と	め	統	先	求	食	せ	な	へ	て	た	つ	落	落	
っ	の	の	間	・	なる	、	治	住	め	料	始	、	、	、	分	た	は	は	
た	標	の	の	家	動	血	と	民	住	と	め	、	町	、	を	。	そ	そ	
。	的	平	生	畜	物	を	利	、	な	人	る	か	都	、	近	れ	れ		
“	と	和	活	・	を	日	権	元	な	と	る	、	へ	、	隣	に	に		
妖	な	な	を	人	消	が	を	々	な	な	、	と	と	、	の	合	合		
怪	り	こ	脅	間	した	多	求	の	つ	火	、	そ	そ	、	大	わ	わ		
を	、	の	か	を	こ	く	め	住	者	種	、	、	、	、	国	せ	せ		
退	楽	地	し	求	の	な	各	者	、	と	、	、	、	へ	て	て	て		
治	園	は	始	め	都	っ	地	、	切	な	、	、	、	と	欲	欲	欲		
し	は	妖	め	、	に	た	で	、	り	り	、	、	、	、	し	し	し		
て	地	怪	た	、	は	。	小	、	開	、	、	、	、	、	い	い	い		
く	獄	達	。	頻	、	、	競	、	い	、	、	、	、	、	っ	っ	っ		
だ	へ	に		繁	、	、	り	、	っ	、	、	、	、	、	た	た	た		
さ	と	と		に	、	、	合	、	た	、	、	、	、	、	。°	。°	。°		
い	姿	と		妖	餌	、	い	、	た	、	、	、	、	、	、	、	、		

法	や	で	も	も				に	者	“	に	し	よ		広	変	備	地	え	と
信	つ	立	が	大				な	た	通	な	て	り	り	げ	わ	え	を	て	願
は	だ	ち	場	人				っ	ち	利	っ	黎	巨		る	ら	た	覆	い	う
荒	だ	入	所	達				た	の	(て	躬			よ	ず	。だ	う	き	と
れ	。	ら	も	も				。	手	ず	い	な			う	、	が	よ	、	、
果		な	噂	決					に)	き	は			に	、	、	う	、	異
て		い	も	し					よ	”	、	都			な	中	、	に	、	国
た		。	知	て					っ	と	い	の			間	、	に	、	、	の
元		触	っ	近					て	蔑	つ	者			達	外	巨	、	、	者
境		ら	て	づ					破	ま	し	か			は	に	大	、	、	が
内		ぬ	た	く					壊	れ	か	『			再	出	壁	、	、	都
だ		神	た	な					さ	、	融	融			び	ら	を	、	、	を
っ		に	い	と					れ	最	通	が			醜	れ	建	、	、	訪
た		な	る	言					封	後	が	利			い	な	設	、	、	れ
場		ん	け	っ					鎖	に	利	か			争	っ	し	、	、	そ
所		と	ど	て					さ	は	な	わ			い	た	四	、	、	の
に		や	暗	い					れ	元	い	れ			を	方	方	、	、	方
立		ら	黙	た					る	信	神	る			繰	に	門	、	、	法
ち		っ	の	。					こ	仰	う	よ			り	門	を	、	、	を
、		て	了	誰					と		と	う						、	、	伝
			解																	

独り言のようにそう言っ
 て辺りを見回した。
 下の骨組みだけになった
 拝殿らしき建築物と、
 手入れのされていない雑
 草に覆われたこの場所
 を見て、誰が神社だとわ
 かるのだろうか。
 「人間は醜い生き物じゃ
 。生きてるだけで
 は満足できぬ愚かしい存
 在じゃからのう。」
 女は草を掻き分け境内を
 進み、その先にある老朽
 化した階段の上に座った
 。落ち着いた女とは裏腹
 に、法信は未だこの狐の
 ことを信じ切れず、待ち
 伏せの可能性を考慮して
 周囲の警戒をしていた。
 「安心せい。ここには妾
 一人しかおらん。待ち伏
 せなどしたら妖狐の名が
 落ちるのでな。」
 「妖怪にもそういった感
 情があるんだな。仲間の
 ためか一族のためか。ま
 あどちらにせよおれはそ
 ういうの嫌いじゃない。」
 「ふん、くだらん。言っ
 たであろう、妾は争いは
 嫌いじゃと。やろうと思
 えば主など簡単じゃ。」
 少し強い風が法信の顔を
 撫でていき、周りの

頭	饒	「	扱	に	も	「	「	き	に	呪	で	差	る	の	「	し	る	の
を	舌	も	え	最	人	お	主	ら	業	い	可	を	奴	人	人	れ	わ	一
下	に	う	る	も	が	れ	は	れ	を	っ	な	埋	は	間	間	な	け	部
げ	語	よ	か	近	い	か	現	た	背	て	い	め	は	の	が	い	じ	の
た	っ	い	？	い	能	？	状	ら	負	や	の	よ	さ	欲	が	や	な	人
。人	て	。そ	こ	力	だ	お	に	。・	つ	は	、	と	れ	に	だ	な	い	間
に	い	れで	そ	け	け	れ	満	。・	だ	そ	、	す	、	狂	け	っ	っ	だ
話	た	、ど	神	ど	ど	も	足	」。	。た	そ	。自	。自	わ	わ	さ	て	。全	
す	こ	うす	な	か	も	な	し	」。	だ	、	分	。自	さ	さ	れ	て	員	
こ	と	るの	か	も	な	」。	て	」。	だ	、	と	。自	。抜	。抜	て	い	が	
と	に	のじ	も	な	」。	」。	お	」。	だ	諸	今	き	。抜	。抜	う	。全		
なく	気	じゃ	も	な	」。	」。	ら	」。	か	刃	の	。抜	。抜	。お	。全			
溜	づ	？	も	な	」。	」。	ん	」。	？	の	。今	。抜	。お	。お	。全			
め	き	」	も	な	」。	」。	の	」。	」	。今	。今	。お	。お	。お	。全			
込	、	」	も	な	」。	」。	か	」。	」	。今	。今	。お	。お	。お	。全			
んで	法	」	も	な	」。	」。	か	」。	」	。今	。今	。お	。お	。お	。全			
い	信	」	も	な	」。	」。	か	」。	」	。今	。今	。お	。お	。お	。全			
	は	」	も	な	」。	」。	か	」。	」	。今	。今	。お	。お	。お	。全			
	軽	」	も	な	」。	」。	か	」。	」	。今	。今	。お	。お	。お	。全			
	く	」	も	な	」。	」。	か	」。	」	。今	。今	。お	。お	。お	。全			

たものが自然と口に出ていた。考えるだけで何も変えられない喪失感と一緒に。

「その前にもう一つだけ聞いておきたいことがある。」

「なんじゃ？」

「なぜ人を喰わないんだ？」

「しつこい男じゃ。何度も言ったであろう。妾は・・・」

女がそう言いかけた時、拝殿の下の空間からガサガサと音が鳴り二匹の小狐が姿を現した。

「なおさら聞きたい。どうしてこんな小動物なんかを欲しがる？」

「お主は妾に殺してもらいたいのかえ？」

「初めは疑っていたけど、お前はおれを騙そうとしてない。だからこそだ。」

女の足下で小狐たちがじゃれあっている。何も知らない無垢なその生物は、自分とは遠くかけ離れた存在のように法信の目に映った。

「これが最後じゃ。妾の提案に乗るか乗るまいか。どうする？」

を	ら	背	衝		を	に	法	に	見	「	「	無	ら	何	「	「	置	法	威
睨	階	後	撃	「	上	、	信	、	逃	お	そ	駄	っ	度	ち	そ	い	信	庄
み	段	に	を	が	げ	色	は	々	し	れ	れ	に	て	捨	よ	れ	て	は	と
小	の	向	感	さ	そ	々	そ	話	て	た	の	な	る	て	う	・	い	少	悲
動	下	け	じ	っ	の	々	こ	を	く	お	ま	聞	っ	い	何	・	た	し	壯
物	へ	る	、	」	場	々	ま	を	れ	礼	で	い	っ	こ	の	・	小	を	交
の	移	。女	法	と	を	々	言	去	た	も	う	っ	う	う	動	・	女	え	た
亡	動	は	信	い	ろ	々	う	ろ	お	思	と	っ	ん	と	物	・	の	視	視
骸	し	先	は	う	う	々	と	し	礼	っ	女	た	な	思	を	・	方	線	線
を	、	ほ	鼻	音	と	々	女	し	も	て	の	ら	ら	っ	考	・	に	が	が
投	法	ど	か	と	な	々	次	た	込	あ	言	、	、	た	え	・	投	法	法
げ	信	座	息	何	が	々	の	あ	み	り	動	そ	お	後	た	・	げ	信	信
返	の	っ	を	か	地	々	言	り	だ	が	を	い	前	で	た	・	て	に	に
し	予	て	吐	が	面	々	動	が	ら	と	待	っ	が	、	た	・	よ	注	注
て	想	い	き	地	に	々	を	な	う	な	た	の	も	足	・	こ	が	が	が
い	通	た	首	面	落	々	待	。」	け	。」	ず	命	も	下	・	し	れ	れ	れ
た	り	場	だけ	ち	ち	々	た		ど	ろ	ず	も	ど	に	・	た	る	る	る
。〃	こ	所	を	ち	〃	々	〃		う	う	ず	〃	〃	〃	・	〃	〃	〃	〃
	ち	か	を	ら	〃	々	〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃	・	〃	〃	〃	〃
	ら	か	を	〃	〃	々	〃		〃	〃	〃	〃	〃	〃	・	〃	〃	〃	〃

を張ってた。今日みたいない日は帰るだけでも	「ああ。いつ妖怪や山賊に襲われるかって気	「それでいいんじゃない？」	腕や腰を触って思いを述べた。	法信は気恥ずかしそうに視線を泳がせ、顔や	ないとても言えなくてな。悪かった。」	叶うとか、半信半疑だったんだ。こうでもし	「お前が怒るのはわかっててやった。願いが	ことを女へ伝えた。	法信は落ち着いた音で心の底から願っていた	「この移動時間を短くしたい。」	えた。	何も無いのに上に浮き上がっているように見	を目の前にした時の幻覚か、女の着物の裾が	獣のような目に変わっている。妖術なのか死	大きく潤んでいた目が、獲物を前にした時の	なるか覚悟せい。」	れは大きな勘違いじゃぞ。返答次第ではどう	「妾が何もせんと高を括っているのなら、そ	「これも妖狐の名が落ちるってやつか？」
-----------------------	----------------------	---------------	----------------	----------------------	--------------------	----------------------	----------------------	-----------	----------------------	-----------------	-----	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----------	----------------------	----------------------	---------------------

